

ヘルダーリンの「最後期の四季の詩」について

小林繁吉[†]

Hölderlins späteste Gedichte : Frühling, Sommer, Herbst und Winter

Shigekichi KOBAYASHI[†]

ABSTRACT

Während der Umnachtungszeit schrieb Hölderlin 22 späteste Gedichte wie Frühling, Sommer, Herbst und Winter. Hier versuche ich diese einheitlichen Jahreszeitengedichte zu interpretieren. Dazu möchte ich die Beziehung zwischen den Jahreszeitengedichten und der Weltstruktur der Gottheit behandeln. In diesem Aufsatz handelt es sich um Titel der vier Jahreszeiten und die Beziehung zwischen Zeit, Raum und Natur u.a.

Vier Jahreszeiten werden von der göttlichen Natur kontrolliert, die hinten Götter stützen und strahlen. Die Naturerscheinung zeigt *Eines und Alles*. Der Wechsel der Jahreszeit in der Natur und auf der Erde könnte den Menschen die Offenbarung der Götter andeuten.

Vier Jahreszeiten sind heilige Gedichte der göttlichen Natur.

Key Words: Hölderlin, vier Jahreszeiten, Natur, Gottheit, *Eines und Alles*

キーワード: ヘルダーリン, 四季, 自然, 神性, 一にして全

1. 序

ヘルダーリンは精神の薄明の時代に入ってから、時々正気に戻ったようになり、少くない詩を書いた。その詩は最後期の詩¹⁾としてひとまとめにされることが多い。この論では、バイスナー版シュトットガルト大全集の48篇の最後期の詩の中の春夏秋冬（それぞれの季節の詩が複数存在する）と題される四季の詩22篇を取り上げて²⁾、ヘルダーリン最後期の詩における春と夏と秋と冬と題された四季の詩全体の意味

について考察していきたい。この時期の詩人ヘルダーリンは、22篇の四季の詩³⁾の制作年月日や署名（作者名）が架空の（現実にはありえない）日付や人名⁴⁾になっている⁵⁾。したがって、以前は、春・夏・秋・冬と題した四季を題名にした詩の意味を疑問視し、まともに取り扱わなかったということもあった。個々の詩をそれぞれ論じる意味は認められてきていると言っていいのだが⁶⁾、本当に詩人ヘルダーリンのこの時期の詩を精神病にかかる以前の詩と関連づけて素朴な気持ちで読み取っていくことができるのか、いま一つ確信できないものが論者にもあった。

この論文では、22篇の春・夏・秋・冬の四季の詩を「最後期の四季の詩」としてまとめて考察し、全体として浮かび上がってくるヘルダ

平成23年1月19日受理

[†] 基礎教育研究センター・教授

ーリンの詩想の意味と、ヘルダーリン終生最大のテーマの一つ、神性の世界構造の意味を探ってみたい。無論、この「最後期の四季の詩」のすべてを詳細に論じることは到底不可能なので、論点をいくつかにしぼり、それによって、中心論題である「最後期の四季の詩」と「神性の世界構造」の関係を明らかにできればと思っている。それでは以下にいくつか問題提起をし、それについて順次考究していきたい。

2. 四季の詩の意味

まず、正気の人でなかった詩人ヘルダーリンが、なぜ執拗に、春、夏、秋、冬という四季名の詩を書きつづけたのかである。もちろん、書きたかったから書いたのだ、と言われればそれまでではあるが、残った作品をまとめて理解しようとする立場からは、なぜ何度も同じ題名で、ほぼ同じ内容の（詩句もほぼ同じと言ってよい）詩を書き連ねたのか。詩の読み手としては「最後期の四季の詩」全体としてその意味を把握したい衝動に駆られる。

最後期以前の詩におけるヘルダーリン詩の理解に基づくと、春は、一年の最初で、暗く寒く何も無い冬の季節から、明るく暑く生命にあふれ形象に満ちた夏への、冬から夏への移行期として、冬の厳しさと夏の豊穡の中間期として、不安の中で期待の高まっている過渡期の喜びが徐々に増していく時として一般的に描かれる。そして、夏は、季節の最高の時であり、至高の喜びにあふれ、神性なものがその輝きと恩寵を一番に放射している最高の時なのである。秋は、至高の時夏から欠乏の時の冬への間（はざま）の季節として、歓喜の情、神性な自然への感謝の気持を保ちながら、次に来る、希望の失せた時期への備えをする時期であり、言わば光が徐々に失せて、一年の終わりを予感させる時なのである。そして、冬は、薄暗く色彩のない絶望の時を象徴していると言えるのであり、表面的に見れば、冬は最悪の時である。

このように、ヘルダーリン詩の一般的理解では、このような大雑把な印象を各季節について述べることができるのだが、この「最後期の四季の詩」においては、春→夏→秋→冬→春という循環が大事なものであり、めぐる四つの季節のまとまりとしての、簡単に言えば、一年一年ごとの回帰そのものに意味があるのである。前述したように、確かに、ヘルダーリン詩においては、夏を最高の時として、次に期待のふくらむ春、それから期待のうすれていく秋、そして最悪の時として冬という意味づけがなされている。が、しかし、だからと言って、夏だけが価値がある、とは詩人は全く考えていないのである。詩人にとっては、夏だけつづく、冬だけつづく、つまり、時の変化、季節の移り変わりが無いことが問題なのであり、時の変遷が詩人の考える神性の世界構造のしるしとなるべきものである⁷⁾。すなわち、春・夏・秋・冬はそれぞれ、季節として必要不可欠なものであり、各々独立した価値を持つものなのである。闇がなければ光の強烈な明るさは理解できないし、欠乏の時がなければ、豊穡の時の大いなる恵みは生じないのである。苦しみと悲しみが深ければ深いほど労苦を脱した時の喜びの開放感を味わうことができよう。春・夏・秋・冬と題された詩は、四季それぞれの意義とともに、四季全体で四大要素とでも言うべき、ヘルダーリン詩における世界構造の根幹を形作っているものなのである。

しかし、ここで別な疑問が湧いてくる。それでは、なぜ春・夏・秋・冬という季節なのか。たとえば、詩人は、朝、昼、夕べ、夜という一日の四つの要素、四つの基本時間を考え出しているのではないかと。確かに、一日のサイクルは、一年における四季の周期と密接な関係がある。ヘルダーリンは、一日のはじめにあたって期待のふくらんでいく朝、そして、真昼に象徴される、太陽の光が黄金のように降りそそぐ最高の時、そして、一日が終わりつつあり、光の乏しくなる夕べの時、そして、闇が支配する夜の時のあり方を詩で表現している。この朝・昼・夕

ベ・夜という四要素のサイクルを「最後期の一日の詩」として書きつづけることもできたはずである。しかし、一日の時は、人間にとって短すぎるのである。一日と四季のほかにも、もう少し長い時として、ヘルダーリンは、人間の人生と歴史を構想した。子供（幼年）時代→青年時代→成人（大人）の時代→老年時代であり、これについても、最高の時は青春時代であるが、人生においては、人間の四つの時代のすべてが意味を持つものであることは言うまでもない。歴史時代に関しても、神話的歴史観が展開されている。原初の神々に見守られていた（無垢で素朴な）時代→神々の栄光のもとで人間が最高度に力を発揮できた（神々と共存した）時代→人間が神々より力を持つと思ひ、神々と離反しはじめた（神々の光がうすれていく人間の没落の）時代→神々と離反した光の乏しい暗い（神々の栄光の乏しい）時代—現代という壮大な神話的人類史が構想されている。しかしながら、上記の人間の生や歴史の詩は、人間には長すぎるのである。確かに、ヘルダーリン詩は、年を扱っても、それが同時に日や人生や歴史に関連してくることが多い。詩の意味の連関構造が、二重、三重に錯綜していると言える。いずれにしろ、「最後期の四季の詩」は短すぎもせず、長すぎもしない、適度な時間間隔を想起させるのである。

さて、このような四季の詩それぞれは、実は、題名と一致した季節の描写にとどまらず、当該の季節以外のほかの季節にも言及しているのである⁸⁾。詩人が四季を一体のものと考えているのがこのことからもうかがえるであろう。

それでは、なぜ詩人は「四季」という題名の詩を書かなかったのか。「四季」というタイトルの詩は一篇もないからである⁹⁾。もちろん、ヘルダーリン詩においてJahreszeit（四季）ということばは四か所出現している¹⁰⁾。しかし、「四季」という題の詩はないのである。このことは、ヘルダーリンが四季を決して問題にしていなかったということではなく、四季というひとまとめの扱いでは、かえって、春、夏、秋、冬という

それぞれの季節の特徴や意義が薄れると考えたと解することができよう。「春」という題の詩によって、ほかの季節を想定させるにしても、「春」という季節を前面に出し、題名が「夏」という詩を通して、「夏」の秘儀を伝え、ほかの季節との違いを際立たせ、逆にほかの季節との連関を強く意識させ、むしろ、無意識に、一年を通じた四季を、〈活性化〉させて理解させる、そういう考えのもと「四季」という題の詩ではなく、「最後期の四季の詩」を書きつづけたと言えるのではないのだろうか。

3. 時空と自然の詩的意味

「最後期の四季の詩」において、春→夏→秋→冬→春という循環構造だけではなく、逆方向の春→冬→秋→夏→春という循環も考えられる。春を起点にして、その前の冬、その前の秋というように、前の季節にさかのぼっていくことによって、その季節の意義がより明示されるからであり、ヘルダーリンの思考には、現前の事柄（現在）を見ながら、過去に思いをはせ、同時に未来への展開を予想するという¹¹⁾、常に現在、過去、未来に限定されない、言わば超時間的見方をするところがあったようである¹²⁾。

「最後期の四季の詩」に関して、この詩的に重大な四つの要素、春、夏、秋、冬を統べているものは、四季ではなく、四季というのは、実質の伴わないレッテルのようなもので、春、夏、秋、冬の実質を引き受けているというわけではない。春夏秋冬の実質、実態を全面的に担っているのは自然である。春、夏、秋、冬という各々の季節（時間と言ってもよい）は、自然（という空間）の中で変転を繰り返し、様相を変えることができたのである。春夏秋冬という季節の根底には自然という土台があったのである¹³⁾。

ヘルダーリン詩においては、この〈自然〉は神性なものとされているが、〈自然〉そのものが神性だというわけではなく、〈自然〉の背後

に神的なるものが、あるいは、〈自然〉の奥底に神々が存在する時に限って〈自然〉は神性なものとなるのである。春・夏・秋・冬の季節にそって言えば、死すべき人間の眼には、春から夏にかけて、神的〈自然〉が活気づき力を増大させ、秋から冬にかけて、神的〈自然〉の力が衰え、神的なるものが大地に乏しくなるということが言える。

「最後の四季の詩」においても、自然が力を発揮し、神的なるものの現前が予感できるのは、天空と大地が和解する時であるとされる。その際、火が重要な役割をするのであるが¹⁴⁾、同時に、神々の人間への現前は大変危険なものなので、神々と人間の仲介者、和解者としての自然が必要になるのである。別な見方をすれば、自然のこの役割は、神的なるもの—神々の、人間に対する直接の啓示が禁じられていることに起因しており、神々の直接の人間との接触は人間を破滅させるという考え方に基づいている。それゆえ、自然の（プロテクトとしての）ヴェールが必要なのである。自然という導き手を通して、強烈な光を和らげ、人間の手で持つことのできる適度な強さの〈火〉にすることができるのである。比喩的に言えば、人間は眼前で神々の具現、現前を実現できないので、自然というヴェールを通してしか予感できない存在ということになる。

そして、自然が、大地や天空や、海や山、畑や森、獣や植物、河や野、雨や嵐、雲や風、光や収穫という形象を通して、神的なるものの啓示をしようとするほど、人間は自然の諸相、大地の変転や天空の状況に目を奪われ、その現象そのものが神性の啓示の示唆だということに気づかなくなるという悲劇的狀況が生じる。その時に、春、夏、秋、冬という四季折々の自然や大地の静かな変化は、かえって、その変転の意味に思いをはせさせることに役立つということになる。春、夏、秋、冬という時間軸の変化は自然という空間の変化と一体となり、その背後、根底にいる神的なるもの、神々を想起させることができるのである。この意味で、「最

後期の四季の詩」22篇は、詩的空間を表わす詩句そのものの意味を超えて、それぞれが、独立しつつ、ことばで言い表わせない、実態としての時間を我々に提示し、時間と空間の秘儀を伝えることになったと言えるのである。22篇それぞれの、「春」や「夏」や「秋」や「冬」が、ランダムに、非連続でありながら、連続して、同じような言い回しでありながら、微妙に異なりつつ、何度も、時禱書¹⁵⁾のように現前することによって、われわれ読者が実在の目の前の自然の四季の変化を見ているだけではなく、別なものに気づく機会を与えてくれることになる。別なものとは何か。それは〈時間〉である。変化しつつ不動のまま存在する星座は無窮の時間を内に秘めている。が、しかし、人間は時間そのものを認識できない。天空の星座のように顕現する「春」「夏」「秋」「冬」は、自然の姿を通して、空間の華麗な変転の移相は具現してくれるが、必ずしも時間の実相を明示してくれるわけではない。有限な時間しか持ちえない死すべき人間と不死の無限の時間を有する神的なものとの関係で言えば、両方の性質を持つ自然は、有限かつ無限ということができる。有限な自然は常に生滅を繰り返し生成流転するが、同時に、自然として存続しつづける。神性との関連で言えば、神々の近くにいるときは〈無限〉で、遠ざかったときは〈有限〉になるという、論理的には有限かつ無限という矛盾した存在ということもできる。その場合、繰り返し「春」「夏」「秋」「冬」の題詩を穏やかに示すことによって、立体的に、四季即自然、自然即四季の隠された意味、時間の暗示的表出を、意識的であれ、無意識的であれ、はかたと言えないこともない。詩人の「春」「夏」「秋」「冬」の多作という強調は、偶然であれ、必然であれ、我々に感じ取りにくい時間を感知させるしるしを与えたものと言えないだろうか。

4.一にして全

「最後期の四季の詩」の春、夏、秋、冬の根底には自然があり、自然が、ある意味で、この春夏秋冬を統べているということを述べてきたが、この春夏秋冬の四要素は自然という形象で一つにまとめられると考えられるので、わかりやすく単純化して言えば、自然という一者が、時間軸（空間の変転を含む）にそって、春、夏、秋、冬という顔をする、あるいは、春、夏、秋、冬という衣装を着る、とでも言えばいいのかもしれない。一言で言うと、一つのものが四つのもんとして現れる、または、四つのもんは、そのまま、一つのもんの現れであるという考え方へと進展させることができる。（一にして多）

「一にして四」である¹⁶⁾。自然と春夏秋冬という詩的四要素は、一にして多という構造を持つことになる。

この考え方と同様に、春夏秋冬に限定せず、大自然の形象、天と地、森と泉、山と川、海と湖、獣と鳥、光と影、家と町、丘と道、花と野、人間と技術、太陽と星、大気と風、……とほぼ無限に形象名を挙げていくことができる。大自然という空間の中で、すべての命あるものと、事物が存在している様を思い浮かべることができる。そして、大自然一者に対してすべてのものが変転の相として存在する、一にして全（一即全）という考え方につながる¹⁷⁾。実は、前述したように、自然の背後、根底から神的なもの、神々が遠ざかると、自然は苦悩に満ち、その運命は過酷で悲惨なものとなるのであるが、神的なものが自然を支えているか、一体となっている場合は、自然は生き生きとし、神的輝きさえも発して（自然というヴェールを通して）すべての事象を展開できるのである。したがって、一にして全は、自然のことを言い表わしているというよりは、自然を含めたすべての事象は、一者である神的なものの放射であるということが言えるのである¹⁸⁾。

死すべきものの変転の相において、神的なものの近在によって、その光を、その適度な光

の強さ、火の熱さを、その火や光に耐えられるようになった適切な、それにふさわしい時（時期）に手にすることができるのである。「最後期の四季の詩」の春・夏・秋・冬の詩全体は、一即多から一即全という段階を踏まえて、神的なるものの啓示というヘルダーリン詩の中心テーマを如実に示すものとなっている。ただ、その表現方法が一つひとつそれぞれの詩というよりは、最後期の四季詩群という形で現れており、我々読者は「最後期の四季の詩」としてヘルダーリン詩を讀解するという方法の一つを試みたことができる。

5. 結

「最後期の四季の詩」が〈一にして全〉の思想を展開しているということを述べてきたが、常夏の地域でも極地でも、温帯地方の四季とは異なる四季が存在する。四季の静かな変転が時間を想起させ、さらに、「一にして全なる者」への考え方へとつながっていく。神的なものは直接人間に現前できないため、柔和で穏やかな火や光として、自然を通して人間に神的なものの啓示をもたらす。詩人の命であることばもそれと同様のものだとヘルダーリンは考えており、偽りの空虚なことば、内実を欠いた神的なものかけらもないことばは、暗い光の乏しい冬の時代に充満しているが、その時にこそ、乏しい時代のわずかな光を保っている自然の内奥から発することばを、自然と一体となり、詩人は発することができるという。そのことばは神的なものであり、そのことばを発することによって、人間は神的なものを呼び起こし、神的なものが到来する準備をすることができる。詩人の見つめる未来において、過去と同様に（詩人は常に一方向ではなく、過去と未来と現在を同時に見ている）神的なものの到来が待たれているのであり、詩人のことばはその可能性を内包しているのである。人間はそのような詩人のことばに驚き恐れるのではなく、最初は素直に心に入ら

なくても、徐々にその詩人のことば、詩に慣れ、詩のことばに親しむことによって、来るべき神々の到来に備えることになる。よき詩は、そのことばに自然の大義を秘めている。自然の大義とはヘルダーリンにとって神々の実在の啓示であり、神的なものと自然と人間との共存である。そして、神々の背後には、神々の根底には、唯一絶対神の座が予感できるが、ヘルダーリン詩における唯一絶対神の想定に関しては口を噤むことにしよう。あるいは、神々、神的なものと唯一絶対神の関係についてはこれ以上言及するのは止めにしようと思う。なぜなら、「最後期の四季の詩」には、そこまでの記述は今のところ読み取れないからであり¹⁹⁾、また、1800年以前の病氣前のヘルダーリンのテーマだった、自由や平等、そして革命へのアプローチの仕方²⁰⁾、神と人間、あるいは、神々と人間の仲介者エムペドクレス²¹⁾やヘラクレスそしてキリスト像²²⁾と、自然や大地との類縁関係も、明確にはほとんど摘出できないからである。

しかし、「最後期の四季の詩」には、チュービンゲンのヘルダーリン塔の周囲の景色が明らかに読み込まれており²³⁾、具体的自然の形象から、詩によって、ことばそのものによって、詩人ヘルダーリンは、神的世界にまさに触れたのであって、神的世界に触れた者は、神的世界と人間との仲介者となった者は、この世（現前する世）からすばやく去らねばならないという詩人（ヘルダーリン）の世界観があり、そのことば通り、神的なものをことばに込めたヘルダーリンは、早くして、この世界から離れ、時々戻ることによって、我々読者に、詩的世界の真実を伝える伝道者となったのである。

リアル（現実）な自然である四季の移り変わり（移ろい）を詩のことばにすることによって、詩人（ヘルダーリン）は自然と共振し、自然と一体となり、それがことばとして残ったのである。したがって、「最後期の四季の詩」は決して精神の尋常でない詩人と称する病人の書いた妄言ではないのであり、後世の我々に何かを伝

え、何かを示唆しているのである。

四季は神的自然の歌っている聖なる詩だということ。

ANMERKUNGEN

- 1) StA. II S. 259ff. Späteste Gedichte
- 2) StA. II
 - S. 272 Der Frühling
 - S. 283 Der Frühling
 - S. 284 Der Herbst
 - S. 285 Der Sommer
 - S. 286 Der Frühling
 - S. 288 Der Frühling
 - S. 292 Der Frühling
 - S. 293 Der Sommer
 - S. 294 Der Winter
 - S. 295 Winter
 - S. 296 Der Winter
 - S. 297 Der Sommer
 - S. 298 Der Frühling
 - S. 299 Der Herbst
 - S. 300 Der Sommer
 - S. 301 Der Sommer
 - S. 303 Der Winter
 - S. 304 Der Winter
 - S. 305 Der Winter
 - S. 307 Der Frühling
 - S. 308 Der Frühling
 - S. 309 Der Frühling
- 3) 春が9篇、夏が5篇、秋2篇、冬が6篇、計22篇である。
- 4) 架空の人名については、Weimar(1986-87) Straub(1986-87) Kraupp(1986-87)参照。
- 5) 例えば StA. II S. 293, S. 297, S. 300, S. 301, S. 303, S. 308 u. S. 309がある。
- 6) Heidegger(1958-60) S.17ff.
Böschstein(1965-66) S.35ff.
Dahlke(2008) S.64ff.
- 7) StA. II S. 288, Z.8

So sind die Zeichen in der Welt, der Wunder viele.

- 8) StA. II S. 284 u. S. 295
- 9) Landers, Schanze u. Schwerte (1983)
- 10) Ebd.
Jahreszeitという語は全作品中、4回出現し、最後期の詩では、StA. II S. 303, Z.2 (der Winter) と StA. II S. 304, Z.3 (der Winter) の2回である。
- 11) 手塚(1981) S.220f.
- 12) ヘルダーリンにおいて、現在は単なる過去と現在の接点、通過点ではなく、過去を現在化させ、現在を未来化させる、生き生きとした流れる動的なもの(時)であり、常に変化し、様々な姿を取るもの、様相を示すものであると解される。
- 13) Büttler(1988-89) S.224ff.
- 14) Gilby(1973) S.47ff.
- 15) Stundenbuch 聖務日課書
- 16) StA. II S. 309, Z.7f.
- 17) Boehm(1988-89) S.20ff.
- 18) StA. II S. 309, Z.7f.
- 19) StA. II S. 283 (der Frühling) の第4詩節 (4. Strophe) にそれらしい記述があるが、確かなもの—ここで言う唯一絶対神—とは考えられない。
- 20) 1800年以降の詩では、StA. II S. 149ff (Germanien) に見て取れる。
- 21) 1800年以前に Empedokles という題の詩がある。
Balmes(2008) S.112
- 22) 1800年以降の詩では、ヘラクレス・キリスト像は
StA. II S. 90ff. (Brod und Wein. An Heine)
StA. II S. 153 (der Einzige. Erste Fassung)
StA. II S. 157 (der Einzige. Zweite Fassung)
StA. II S. 161 (der Einzige. Dritte Fassung)
の中にある。
- 23) Büttler(1988-89) S.247

LITERATURVERZEICHNIS

TEXT

- 1) Hölderlin : Werke und Briefe, hrsg. von Friedrich Beißner und Jochen Schmidt, Frankfurt am Main 1969.
- 2) Hölderlin : Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. (StA.)

Bd.II, hrsg. von Friedrich Beißner und Adolf Beck. Stuttgart 1970.

- 3) Hölderlin : Sämtliche Werke. Die Kritische Textausgabe (KTA) Bd.9, hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main 1983.
- 4) Hölderlin : Gesammelte Werke, hrsg. von Hans Jürgen Balmes. Frankfurt am Main 2008.
- 5) 手塚富雄・浅井昌男他訳 : ヘルダーリン全集 [全 4 巻] (河出書房新社) 1973.

LITERATUR

- 1) Bachmeier, H. / Horst, T. / Reisinger, P. : Hölderlin. Transzendente Reflexion der Poesie. Stuttgart 1979.
- 2) Bennhold-Thomsen, Anke : Die Bedeutung der Titanen in Hölderlins Spätwerk, in: Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87), S.226-254.
- 3) Boehm, Gottfried : *Eins zu sein und Alles zu werden*, in: Hölderlin- Jahrbuch 26 (1988-89), S.20-37.
- 4) Böckmann, Paul : Das *Späte* in Hölderlins Spätwerk, in: Hölderlin- Jahrbuch 12 (1961-62), S.205-221.
- 5) Böschstein, Bernhard : Hölderlins späteste Gedichte, in: Hölderlin- Jahrbuch 14 (1965-66), S.35-56.
- 6) Böschstein, Bernhard u.a. : Über Hölderlin. Transzendente Reflexion der Poesie. Frankfurt am Main 1970.
- 7) Büttler, Stefan : Natur-Ein Grundwort Hölderlins, in: Hölderlin- Jahrbuch 26 (1988-89), S.224-247.
- 8) Dahlke, Karin : Äußerste Freiheit. Wahnsinn / Sublimierung / Poetik des tragischen der Moderne. Würzburg 2008.
- 9) Frank, Manfred : Hölderlin über den Mythos, in: Hölderlin- Jahrbuch 27 (1990-91), S.1-31.
- 10) Franz, Michael : Annäherungen an Hölderlins Verrücktheit, in: Hölderlin- Jahrbuch 22 (1980-81), S.274-294.
- 11) Gilby, William : Das Bild des Feuers bei Hölderlin. Bonn 1973.
- 12) Groddeck, Wolfam : Die Nacht. Überlegungen zur Lektüre der späten Gestalt von *Brod und Wein*, in: Hölderlin- Jahrbuch 21 (1978-79), S.206-224.
- 13) Heidegger, Martin : Hölderlins Erde und Himmel, in: Hölderlin- Jahrbuch 11 (1958-60), S.274-294.
- 14) Jünger, Eberhard : Die Wahrheit des Mythos und die Notwendigkeit der Entmythologisierung, in: Hölderlin- Jahrbuch 27 (1990-91), S.32-50.
- 15) Kraupp, Michael : *Scaliger Rosa*, in: Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87), S.226-254.
- 16) Kreutzer, Hans Joachim : Kolonie und Vaterland in Hölderlins

- später Lyrik, in: Hölderlin- Jahrbuch 22 (1980-81), S.18-46.
- 17) Rühle, Volker : Verdichtete Zeit. München 2010.
- 18) Sauder, Gerhard : Hölderlins Laufbahn als Schriftsteller, in:
Hölderlin- Jahrbuch 24 (1984-85), S.139-166.
- 19) Schmidt, Jochen : Der Begriff des Zoms in Hölderlins Spätwerk, in:
Hölderlin- Jahrbuch 15 (1967-68), S.128-157.
- 20) Straub, Rudolf : *Scardanal-Scardanelli*. Bericht über eine
Entdeckung während einer Reise in die Quellgebiete des Rheins, in:
Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87), S.275-280.
- 21) Uffhausen, Dietrich : *Weh! Närrisch machen sie mich*. Hölderlins
Internierung im Auttenriethschen Klinikum (Tübingen 1806/07) als
die entscheidende Wende seines Lebens, in: Hölderlin- Jahrbuch 24
(1984-85), S.306-365.
- 22) Weimar, Klaus : Scardanelli, in: Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87),
S.273-274.
- 23) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin I. Teil : Die Gedichte, hrsg. von
W. Landers, H. Schanze und H. Schwerte. Tübingen 1983.
- 24) 手塚富雄 : ヘルダーリン 下 [手塚富雄 著作集 第2巻]
(中央公論社) 1981 S.202-221